

第83回 小中高校生の吃音のつどい(演劇で遊ぼう！)

6月16日(日)小学生7人、中学生4人、高校生6人、兄弟姉妹2人、ご両親21人、スタッフ32人の計72名が参加。北区立王子小学校王子ホールとことばの教室で開催。すずきこーたさん達にお願いして、5回目の演劇レッスン。今年は、演劇を考える時間を長く取っていただくようお願いしました。グループで話し合い考える時間が十分とれたことは良かったと思います。私のグループでは、早い段階である程度の演劇の形を作ることができましたが、時間がまだあるのでもっとじっくり考えようとさらに話し合ったことで、「負けるな自分」の部分などを初期案よりもブラッシュアップできました。話し合っただけで演劇を作っていく、何回かリハーサルし、その上で意見を出し合い演劇を作る、という過程に意味があると思います。スタッフ向け事前演劇レッスンからお世話になりました会場校の岸香織先生、松村雅子先生、こころより感謝いたします。案内状発送ミーティング及び反省会でお世話になりました三鷹市立南浦小 小俣美佳子先生、新宿区教育センター 瀧田智子先生もありがとうございました。子供達の感想交えて振り返ります。

(リーダー 遠藤優、川口亮太、石橋優樹)

開発 彩子(演劇デザインギルド)

今年初めて、ワークショップの進行役として「つどい」の場に入りました。私にとっても楽しく意義深い時間でした。有り難うございました。

昔の人が書いた、**吃りとぜんぜん関係無い俳句を演劇にする**なんて、なんのこった？って突拍子もなく感じた方もいたんじゃないかなと思います。**更にそれを食べる人が登場する演劇に新しく作りかえる**なんて？！

でもやってみていかがでしたか。これが結構どうにかなるもので、というよりも、なんなら名作が生まれたな！と皆さん感じられたのではないのでしょうか。**蛙語しか話さないグループもいたし、大根になる役の人がいたり、雨がどもったり！**人間の思考の飛躍力、創造力ってすごいですよね。それから相手を「受け止める」「感じる」力。そして「伝えたい！」という思いが身体を通して表現されていました。

綺麗に体裁が整っているけど表面的な所で終わってしまっている作品よりずっと、胸を打つ内容になっていたと思います。やっぱり、自分のことを語ってというのは真に迫っている。

私はこれまで、いろんな年齢、職業、立場の人々と共に、いろんな場所でワークショップを行ってきました。

劇場で演劇が好きな人々と。学校で生徒達と。そ

れから、腎不全の透析患者さんの患者会とか、パワーハラスメントを受けた人々の集まりとか。フィリピンの山岳民族の村で自然破壊をテーマに演劇作品作りをしたこともあります。

同じコミュニティだとか、同じ悩みを抱えた人々が集まって、自分達に起きた出来事を伝えて、言葉だけでなく身体全体で、響き合わせていくんです。共感したり、喜び悲しみ辛さを分け合い、新しい視点に出会って刺激を受けたり、考え方がちょっと変わったり。時には意見が対立することもある。

演劇っていうのは架空の世界でもあるから、現実でがんじがらめになっちゃった時の突破口になることがあります。自分のまんまで、自分として話しているだけでは起きないことが起きてくるのが、演劇ワークショップの効用です。

しかし例え架空でも、どんなテーマであっても、人間は社会的な生き物だから建前もあるし、皆に自分の本当の心を打ち明けるのはすごく大変なことです。人前で自分のことを語るのには勇気がいる。その為には、ワークショップの場を安全で安心できる場所にしておく前提があります。その点でこの「つどい」は皆さんが何年もかけて積み上げてきた、本当に貴重な場所だと思いました。

午前中の時間だけで演劇を作るのはなかなかの強行スケジュールなのですが、何回か回数を重ねていく内に、演劇で遊ぶコツみたいなのが分か

ってくるはずですよ。私ももっと、もっと、みんな行ける！と思っています。来年も演劇する機会があったら、初めての方も再びの方もどうぞ皆さん安心してエイヤッ！とはじけに来てみてください。

すずき こーた (演劇デザインギルド)

今年もつどいで「演劇で遊ぼう」を進行しました、すずきこーたです。毎年秋(冬の手前)に行なっているのですが、今年は夏前の開催になりました。少し汗ばむような日でしたが、寒い時の開催よりは、朝からからだは縮こまってない感じで良かったと思いました。また雨の日よりも気持ちも「晴れて」いたように思います。皆さんの気持ちのこもった演劇がたくさん見られて、私も力をもらいました。

今年は、「俳句を演劇にしちゃおう！」という、ユニークな試みに挑戦しました。実は私は何度もこの「俳句から演劇」の活動をしたことがあります。だから私にとっては「奇をてらった」ものではないのですが、皆さんはどう感じたでしょうか。今回皆さんがつくったものは、これまで私が見てきた「俳句から演劇」のどの演劇よりも、訴えるものがあったと思います。

昨年も思いましたが、私が初めてつどいに参加した時は、「どもりなんか無くなっちゃえ！」という演劇が多かったのですが、もちろん今だってなくなって欲しいと思ってる人もいるとは思いますが、それよりも「ドモガエル、負けるな自分、それで良い(もとは小林一茶の、やせ蛙 負けるな一茶 ここにあり)」のように、自分を受け入れるような演劇が多くなってきています。そして、そのように自分を受け入れることで他の人を受け入れることのできる、素敵な人達の集まりだなあとこのことを、改めて感じました。

Diversity (ダイバーシティ_多様性) や、Inclusive (インクルーシブ__包括的な)、多文化共生などがいろんなところで言われていますが、実際は他の人を認めるというのは難しいことです。他の人を認めるのが難しい人が少なからずいるというのが現状です。自己責任論がすぐに取り上げられたり、自分と違う価値観の人の全てを否定したり、自分や自分の周りの人だけの利益を

追求したり、悲しいことにそんな世の中になっているように感じます。自分を受け入れ、他の人を受け入れるというのは、裏を返せば、自分は上手くできないかもしれないけれど、他の人だって完璧ではないんだ、お互いに迷惑を掛け合いながら生きていくんだ、ということです。それが人間として、社会として成熟しているのだと私は考えます。

「秋深き、隣は何を する人ぞ」のグループでは、ドモリでいじめられた姉妹を、変な顔で慰め、そして立ち向かうとする姿勢を見せてくれました。実は私は、最初にどもりの人を入れた俳句に作り変えてもらった時のストップモーションを見た時には、変顔で姉妹をいじめているのかと思いました。私と同じように観ていた方はいらっしやいませんか？でも全くの逆で、変顔で笑わそう、励まそうとしているのだと分かり、胸に熱いものを感じました。

…話は少し変わりますが、これが「からだで表現すること」の面白いところだなあと感じます。思っていることと現れてくるものは必ずしも一致しない、表現する人と受け止める人にはギャップがあるので、私達は、どのように表現していくか、つまり受け取る側がどう感じるかを想像しながら表現する必要があります。その想像する力が弱いから、最近問題になっている「バイトテロ」のようなことが起るのではないかと私は思うのです。

話を俳句に戻します。「大根引き 大根で道を教えけり」のグループや「うつむいて 何を思案の百合の花」のグループでは、吃ってしまったことを後悔する場面を演劇にしてくれました。「あーあ、吃っちゃった」という場面をつくったとしても、前向きにどもりと付き合おうという姿勢が見られました。

でもグループで相談をしている時に「ハッピーエンドにしたい」ということを言った人がいました。「どもりを受け入れるか受け入れないか」ということと、「幸せを感じることは別物です。同時に受け入れても受け入れなくても、幸せな気持ちになる権利は誰でも持っています。自分の気持ちをグループのメンバーに伝えるのは、とても素敵なことだと見てて思いました。

演劇はファンタジー(空想)のことをやることもありますし、現実のことを扱うこともあります。でもそれ



だけではなく、現実の練習になることもあるし、現実には起こらないけど、やってみたら現実の自分の気持ちが明るくなった、ということもあります。

演劇の活動は、つどいの中では敬遠されがちな活動だと言われていますし、やりたくない気持ちも分かります。でも、演劇には多くの側面があって、つどいの人達のためにも開かれていると思いますし、つどいの方達が有効活用できるものだと思います。ぜひ、また、一緒に楽しいことをやりましょう！

松村 雅子(王子小ことばの教室教諭)

吃音のつどいは、今年の演劇のつどい、料理のつどい、今回の演劇のつどいで3回参加しました。このつどいは、通級児童や保護者にとって、ことば教室では、得ることができない経験となっています。

先日、ことばの教室で、吃音のグループ活動を行いました。1年生の担当児童が初めて参加し、感想を聞いたところ、「11人、みんなもっていたね」と話していました。グループ活動に参加して、自分の他にも、自分と同じような話し方で、気にしている子もいれば、気にしないで話し続ける子もいるんだと感じてもらえたらいいなと思っています。

このつどいは、小学生から大学生、保護者の皆様、スタッフの方などたくさんの方が、ありのままの自分を出せる場所です。そんな場所があることをこれからも紹介していきたいと思います。私自身も、自分をさらけ出し、つどいの終わる頃には、さわやかな気持ちになりました。どうもありがとうございました。

体験談

橋本(神戸) 梓(つどいスタッフ)

私が吃りを意識し始めたのは、保育園の年長組の頃に仲の良い友達に「その話し方変だよ。」と言われたことがきっかけです。それまでは全くと言っていいほど、自分の話し方に対して気にすることなく、家族や親族からも言われたことがなかったため、特に気にすることなく過ごしてきました。後に母親に聞いたところ、2歳頃より吃り始めたそうで

す。

小学生になり、今まで以上に授業や日直、委員会活動など話す場面が増えました。私の出身の県では朝の時間に健康観察というものがあり、先生が一人一人の名前を呼んでいき、元気であれば「はい、元気です。」、風邪気味であれば「はい、咳が出ます。」などと返事をしていきます。私は、「はい」の「は」がどうしても言えず、黙ってしまうこともありました。その度に周りの友達から「どうしたの?」というような視線を向けられ、少し好意を持っていた男の子から「その話し方変だよ。病気の?」と言われたことがありました。私の記憶では保育園の頃は男女関係無く和気あいあいと過ごしてきましたが、小学校へ上がると男女ごとにグループ化し異性を意識し始めたような気がします。好意を持っていた男の子に私の話し方について言われたことがショックで、笑われたり、恥ずかしいところを見せたくないという思いから、同性とばかり話し、異性を避けてきました。

また、高学年になり園芸委員会の委員長になった際に全校集会で挨拶をしなければいけない場面がありました。皆の前で吃ったらどうしよう、恥ずかしいという思いがよぎりましたが、私には1歳年下の妹がおり、そのことよりも妹の前ではカッコいいお姉ちゃんになりたい、もし私が上手く話せなかったら、妹が周りからいじめられるのではないかと、私のことで何か言われるのではないかとという思いが強かったです。無事に全校集会での挨拶を終えることができ、やり切ったという達成感がありました。しかし、心のどこかにつっかえてしまった、陰で何か言われているのではないかと思っている自分もいました。

中学生になると私のことを知らない人達が一気に増え、環境も変わり、吃ってしまったらどう思われるのだろうと、ますます消極的になり周りの目ばかり気にするようになっていました。そして大人しく、控えめで地味に目立たず過ごしていたら、吃ってしまってもさほど注目されないのではという考えにいつの間になってしまいました。

そして小中学生の頃の生き方や体験から、異性を避け、目立たずに過ごしていこうという考えを抱えながら高校生になりました。ある時、メールでやり



とりをしていた違うクラスの子に告白をされました。私も好意があったため「自分のことを良いと思ってくれる人があるんだ!」と、とても嬉しい気持ちになりましたが、それと同時に、考えてみると、食べる私を見たら相手はどう思うのだろうか、上手く話せない私と付き合ったら相手も友達から何か言われ、恥ずかしい思いをするのではないかと、相手に申し訳ないという思いが強く出てしまいました。結局、吃音のことを相手に言えず、適当な理由をこじつけて断ってしまいました。その時は、これから先、付き合うことや結婚することはできないだろうと思っていました。

吃音に対しては、高校一年生の時に参加した小中高生の吃音のつどいをきっかけに吃音のことを知り、食べることは恥ずかしいことではないということを感じ、少しずつ自分の吃音と向き合い始められるようになりました。つどいに参加したこと、いろいろな経験を通して自分の考えも変化していったように思います。それから、男性とお付き合いすることがあり、少しずつ自分のことを知って欲しいと思うようになり、お付き合いする前にカミングアウトしました。どう思われるのか不安で心配で、これで嫌われたらどうしようと思ってしまう気持ちもありましたが、相手は「吃っていてもそれはその人の一部分だし、伝えたいことが伝われば良いんじゃない。たくさん良いところがあるじゃん」と言ってくれました。これまで吃音のことが頭の大部分を占めていましたが、その言葉になんとか安心したように感じたことを覚えています。また、楽しいことや思い出を誰かと一緒に体験し作っていくことは楽しくて良いものだと感じました。

今までは、吃音の私を相手はどう思うのか、迷惑をかけてしまうのではないかと、相手が周りからどう思われるのかなどと、先走り自分で決めつけていましたが、どう思いどう感じるのかは相手が決めるものであり、初めから自分で壁を作ってしまうのはなんだかもったいないなと思いました。過去の自分にアドバイスするなら、「自分の気持ちに正直に、恐れなくて欲しい!」と伝えたいです。もし、吃音に対してマイナスに捉える相手であれば、ご縁が無いと思えばいいですし、少しでも自分のことを良いと言ってくれる人がどこかにいるはずだと信じてい

ます。自分のピュアな気持ちを大切にしたいです。

私はこれから先も吃音と向き合っていくことでしょう。大変なこともあるかもしれませんが、自分の気持ちに正直に、吃っても伝えたいことはなるべく伝えられるようにしていきたいと思います。そして仕事もプライベートでも目の前にある事を一生懸命していきたいと思います。

後記

◆やせガエル 負けるな一茶 ここにあり 江戸時代の著名な俳人一茶。小6 国語で習いますか? 授業で習う前に、当つどいで知っていると、さらにその意味を深く理解できることでしょ。

♥ドモラーマとのいい対話が始まったようです。ゆっくり喋れば…一時的にどもりが収まる…等の対症療法ではなく、良い悩み方されることで、人として成長されると私は強く感じます。

◆左脳ではなく右脳の声を聴こう この前失敗したから、次はもうおとなしくやめておこう…と、論理的に妥当と思える、リスクを避ける方向に行く(左脳の声)のではなく、言いたいな…とふっと思い立ったら、そんな右脳の声にこそ耳を傾けて、進もう。どもったらどもった時。発表もプレゼンも、あきらめてしまうのは実にもったいないです。

そんな前向きな姿勢の女性が、さらにもしどもられるとしたら、それはそれは、人として魅力倍加。

♥「いじめっ子に「これが僕」と言える子よ 君の前には 希望が見える(石井由美子)」NPO 大阪スタリクプロジェクト会報「新生」2019 年 6 月号より転載。(転載ご了承感謝!)

◆演劇体験に対してののびのびしたこの思い、中学生になっても、持ち続けてもらえたら…と思います。だからこそ、来年度も引き続き、演劇で遊ぼうのレッスン行いたい。演劇とどもることですが…、一見、接点など無さそうに見えますが…、実はとても良い接点あります。これからも深めていきたい。

さとうたかはる